授業で使える近世落合の史料

―近世落合の特質と地域を学ぶ意義―

Historical materials of early modern time Ochiai area usable by a class

― The characteristic of early modern time Ochiai area and Significance of studying the community ―

福井　延幸
(Nobuyuki FUKUI)

はじめに

地域を題材に歴史を学ぶとき，その景観を諸史料から再現し，そこから学ぶということはいかにして可能であろうか？景観から歴史を読み解く作業としては，絵画史料を活用しての黒田日出男の業績を先駆として，近年多くの蓄積がもたらされている。絵画以外にも景観を想起させるような史料の活用を考えたとき，地域にはさまざまな素材が残されている。昭和45年の『中学校指導書社会編』には「全国的に見て，一般的には，縄文・弥生時代の文化の学習に関する遺跡や遺物，江戸時代，明治時代の学習に関連する人物などが多いが，地域によっては，中世の城跡，近世の城郭，豪族屋敷村，城下町，その他の集落，新田開発，河川開さくの記念碑，関所跡，旧街道の姿などのほか，神社，仏閣，石仏，石塔，道標などがある。また，祠や千歯こき，鍬，鋤などの農工具や行燈，ランプなどの日用品，あるいは地域の民間行事，風俗習慣，民話・伝承，芸能，工芸品や特産物などがある。このように郷土には，わが国の歴史の発展に結びつく多くのすぐれた文化遺産が，身近なところに得られることが多い。」[1] と身近な地域の文化財の例が示されている。教材としても捉えられる地域文化財について，西川幸治は「地域文化財とはその地方のその地域の町や村の生活空間を構成し，それを魅力あるもの，活力ある生き生きとしたものものとするために装置されたものをさします。鎮守の森，寺院の庭，あるいは辻の祠，野辺の石仏など，あるいは春や秋の祭り，盆や暮れ，新年の年中行事など一切がっさい，地域文化財として注目します。」[2] とその地域の生活空間の中で何気なく存在し，その価値を見過ごしてしまいがちなものや景観，行事や風俗，記憶なども地域文化財を捉えている。岩田一彦は，「体験的学習をもっとも進めていくことができるのが，地域教材である。みる，きく，さわる，臭いをかぐ，味わうといった五感を使っての対象の理解が地域教材ではできる。」[3] という。地域教材をもとにして当時の人々の生活を五感をつかってさまざまな形でうかがうことが可能だろう。

これらのことを鑑み，本稿では古地図・文献など当時の地域における景観を明らかにする諸史料から近世における新宿区の落合地域の特質を探り，そこから近世落合を地域素材として教材開発について考察していく。さらにその教材化への道筋をたてることによって中学校段階で

の使用を念頭に置いた「授業で使える近世落合の史料」の作成を試みていきたい。

Ⅰ．落合から地域を学ぶ

１．学習指導要領にみる地域

今次の改訂において平成20年３月28日告示された中学校学習指導要領 第２章各教科 第２節社会 歴史的分野での「身近な地域の歴史」にかかわる項目としては，以下のようなものがある。

まず，「目標」の⑵に「国家・社会及び文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物と現在に伝わる文化遺産を，その時代や地域との関連において理解させ，尊重する態度を育てる。」とある。また，「目標」⑷では，「身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味・関心を高め，様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる。」と述べられている。これらは平成一〇年度版の「目標」⑵・⑷と同文である。

「「身近な地域の歴史や具体的な事象の学習」については，これらを取り上げることでその時代の様子を実感させ，生徒の歴史に対する興味・関心を高めることが求められる。」[4] と興味・関心を高めていくために時代の様子を実感させる，学習内容が具体的になる身近な地域の歴史がとりあげられるのである。

「内容」では平成10年版の⑴「歴史の流れと地域の歴史」が「歴史のとらえ方」と変更されている。イには，「身近な地域の歴史を調べる活動を通して，地域への関心を高め，地域の具体的な事柄とのかかわりの中で我が国の歴史を理解させるとともに，受け継がれてきた伝統や文化への関心を高め，歴史の学び方を身に付けさせる。」と身近な地域の歴史の学習について言及されている。伝統や文化重視の視点から「受け継がれてきた伝統や文化への関心を高め」いう文言が加えられている。身近な地域を取り上げることで地域への関心を高め，地域という具体性のあるものから歴史を理解させようというのである。

「内容の取扱い」では，⑵「イについては，内容の⑵以下とかかわらせて計画的に実施し，地域の特性に応じた時代を取り上げるようにするとともに，人々の生活や生活に根ざした伝統や文化に着目した取扱いを工夫すること。その際，博物館，郷土資料館などの施設の活用や地域の人々の協力も考慮すること。」とされている。それまでの博物館，郷土資料館の活用に加えて「地域の人々の協力も考慮すること」と地域の人材の活用についても言及されるようになった。

この「身近な地域の歴史を調べる活動」のねらいは，「地域への関心を高め，地域の具体的な事柄とのかかわりの中で我が国の歴史を理解させるとともに，受け継がれてきた伝統や文化への関心を高め，歴史の学び方を身に付けさせることである。」[5] と述べられている。

また，学習にあたっても，「生徒による「調べる活動」となるようにし，「人々の生活や生活に根ざした伝統や文化に着目した取扱いを工夫する」（内容の取扱い）とともに，身近な地域における具体的な歴史的事象からその時代の様子を考えさせるなどして，「受け継がれてきた伝

統や文化への関心を高め，歴史の学び方を身に付けさせる」ようにする。その際，「民俗学や考古学などの成果」（「内容の取扱い」⑴ カ）を生かし，「博物館，郷土資料館などの施設の活用や地域の人々の協力も考慮する」（内容の取扱い）ようにする。」と説明されている。地域を素材として我が国の歴史を理解させ，これまでの学問の研究成果や博物館・郷土資料館などの具体的資料や地域の人々の協力を活用しながら歴史の学び方を身に付けさせるという活動が想定されているのである。そこまでは従前のものと変わりはないが，今回，伝統や文化重視の観点から「受け継がれてきた伝統や文化への関心を高め」の文言が加えられるようになったのである。

近世については，学習指導要領の目標の⑷には「身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味・関心を高め，様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる。」とあり，この目標のもと，２内容の⑷近世の日本のウには「産業や交通の発達，教育の普及と文化の広がりなどを通して，町人文化が都市を中心に形成されたことや，各地方の生活文化が生まれたことを理解させる。」とある。

３内容の取り扱いの⑸のウには「「産業や交通の発達」については，身近な地域の特色を生かすようにすること。「各地方の生活文化」については，身近な地域の事例を取り上げるように配慮し，藩校や寺子屋などによる「教育の普及」や社会的な「文化の広がり」と関連させて，現在との結び付きに気付かせるようにすること。」とある。

これに関し『中学校学習指導要領解説　社会編』では，「「産業や交通の発達」については，例えば農林水産業の発達，手工業や商業の発達，河川・海上交通や街道の発達などの中から，地域の特色を生かした事例を選んで内容を構成するなど，「身近な地域の特色を生かす」（内容の取扱い）ことに留意する。」「衣食住，年中行事，祭礼などの「各地方の生活文化」が生まれたことを，「身近な地域の事例を取り上げるように配慮」（内容の取扱い）して理解させるとともに，それと「現在との結び付き」（内容の取扱い）に気付かせる。その際，「代表的な事例を取り上げてその特色を考えさせる」（内容の取扱い⑴ ウ）ようにする。この中項目の学習に際しては，内容の⑴のイの身近な地域の歴史を調べる活動と結び付けて行うことも考えられる。」とある。「身近な地域の事例を取り上げる」こと，「現在との結びつきに気付かせるようにする」ということがいわれており，さらに「身近な地域の歴史を調べる活動と結び付け」た学習活動の可能性にふれている。[7)]

「身近な地域の特色を生かす」ということを考えたとき，落合にはどのような特色があるのだろうか？江戸時代の落合と現在の落合にどのような結び付きが見出せるのであろうか？また，どのような体感的な身近な地域の歴史を調べる活動が取り入れられるだろうか？

２．落合の定義

落合の地名は永禄２年（1559）の『小田原衆所領役帳』には，「興津加賀守　廿貫五百七拾

文　江戸　落合」[8]，「拾貫五百文　江戸　落合　鈴木分　長野弥六分」[9] とすでに記載されており，その起こりは中世に遡ることができる。『新編武蔵風土記稿』は地名の由来について「村名は神田上水の溝渠と井草川と当所にて落合し故かく名付と云」[10] と神田上水と井草川（妙正寺川）が落ち合う地点であるところから名付けられたものだという。他地域にも落合の地名がみられるが，当所と同様に川などの合流点である場合が多い。上落合村・下落合村ともに「用水は井草川より引用ゆ」[11]，葛ヶ谷村も「用水は玉川の分水を引沃く」[12] とある。神田上水は玉川上水の分水も利用しており，当所落合は神田上水と妙正寺川という二つの河川と密接なかかわりを持つ地域であるということがこれら農業用水の利用という点からもわかる。また，慶安２年（1649）から３年に成立したという『武蔵田園簿』には上落合村・下落合村・葛ヶ谷村の記載がある。17世紀前半のものであろう[13] というその村高は，上落合村が139石３斗３升９合。うち71石２斗９升６合が田方，68石４升３合が畑方。すべて代官支配地である。下落合村は197石８斗２升７合。うち150石６斗８升４合２勺が田方，47石１斗４升２合８勺が畑方。182石９斗４升４合は太田新左衛門の所領，14石８斗８升３合は代官所領地であった。葛ヶ谷村は村高77石１斗７升５合。うち43石８斗４升６合７勺が田方，33石３斗２升８合３勺が畑方。15石９斗９升５合が細田加右衛門，２石７升が木村久左衛門，２石２升が大草半左衛門，４石４升が太田新左衛門の所領，３石５升が代官所領であった。[14] 葛ケ谷村については，『小田原衆所領役帳』に「壱貫弐百文　高田内　葛谷」[15] と記載されていることで戦国期には存在したことが確認できるのである。

このように近世初期には既に上落合・下落合の両村に分かれ，葛ヶ谷村の記録も残っているが，明治22年（1889）５月１日には，上落合・下落合の両村とその西部の葛ヶ谷村を合わせた落合村が成立する。なおその際，下落合村の椎名町は長崎村に合併されている。その後，大正13年（1924）２月１日に落合町成立。昭和７年（1932）10月１日に淀橋区が成立すると落合町の範囲は旧上落合村域が上落合一丁目・上落合二丁目，旧下落合村域が下落合一丁目・下落合二丁目・下落合三丁目・下落合四丁目・下落合五丁目，旧葛ヶ谷村域が西落合一丁目・西落合二丁目・西落合三丁目となった。昭和22年（1947）３月15日に淀橋区，四谷区，牛込区が合併し新宿区が成立すると，それに伴い現在のように新宿区の一部となった。昭和40年（1965）８月１日の新住居表示により下落合西部は中落合と中井になった。続いて上落合が昭和41年（1966）年11月10日，下落合が昭和47年（1972）１月１日に新住居表示が実施された。なおその際，河川改修後の神田川を境界としたため，神田川以北にあった旧戸塚三・四丁目の一部が編入された。[16]

現在，新宿区内において落合地区というと区の西北部地域，近代における「落合村・落合町」の範囲を指している。近世においての上落合村，下落合村，そして葛ヶ谷村の範囲である。現在の住居表示でいう上落合一丁目・上落合二丁目・上落合三丁目，中井一丁目・中井二丁目，西落合一丁目・西落合二丁目・西落合三丁目・西落合四丁目，中落合一丁目・中落合二丁目・中落合三丁目・中落合四丁目，下落合一丁目・下落合二丁目・下落合三丁目・下落合四丁目で

ある。本稿における「落合」とは近世においての上落合村，下落合村，葛ヶ谷村の範囲を指すものとしていく。

３．近世の落合についての先行研究

近世の落合についての研究としては『新宿区史』，『地図で見る新宿区の移り変わり　戸塚・落合編』，『新宿区の民俗（４）落合地区編』などがある。文化財に関する研究の蓄積も，昭和27年の『新宿区文化財一覧表』の発行以来多数にのぼる。この『新宿区文化財一覧表』を平易な物語風の解説書にして小・中学校，一般区民に知らせる目的で昭和30年に刊行されたのが『新宿区の史蹟をたずねて』である。これら地域の歴史の掘り起こし作業において区内小学校教諭，とりわけ社会科関係の教諭の尽力が大であった。昭和32年10月には新宿区教育研究会社会科部が『新宿区の昔と今』を作成し，小・中学校の教材として，また一般区民の希望者に配布した。

さらに，さきの『新宿区の史蹟をたずねて』の改訂と区内文化財の再検討をもとに昭和38年に『新宿区文化財』が発行されている。この『新宿区文化財』は昭和42年，昭和54年と改訂版が刊行され，その後，新宿歴史博物館より『新宿文化財ガイド』として刊行されるようになった。現在では平成19年に改訂第三版が刊行されている。

地域に関する教材としては，新宿区教育委員会発行の中学校社会科副読本『のびゆく新宿』がある。昭和56年に初版が発行され，以来現在まで九訂がなされている。昭和56年に発行された初版の「Ⅱ　新宿のすがた」の第３章「新宿区のあゆみ」では地域史研究の成果が活用され，新宿区の歴史が原始時代から戦後のあゆみまでが詳述されている。その後，昭和60年発行の改訂新版まではほぼ同内容であるが，若干加筆された部分がある。しかし，昭和63年発行の三訂版からは内容が精選され，平成６年発行の五訂新版からは「新宿区のあゆみ」に通じるような歴史的な記述は削除され，「身近な地域の歴史」について学習する内容が極端に少なくなってしまった。

地域の歴史を保存する活動としては，中落合三丁目に在住であった故竹田助雄氏が私費を投じて昭和37年から42年にかけて50号にわたり発行していた地域新聞『落合新聞』がある。『落合新聞』については，「高度経済成長下，人々が昔のことを忘れていく中で，落合の昔のことを丹念に調べ，江戸時代の落合の様子や，この明治時代の落合など，人々の記憶から消えてゆく落合の様々なことを取り上げていました。また，下落合の御禁止山について，落合秘境として自然のまま残すように呼びかけを行い，現在のおとめ山公園ができるきっかけをつくる等，過去のことだけでなく，落合の将来のことも取り上げるなど，落合のことを知るには欠かせないものとなっています。」と評価されるもので，まさに地域独自の文化をつくりあげるといういわゆる地元学の活動そのものと呼べるものであろう。また，『落合新聞』からは平成12年にコミュニティおちあいあれこれにより『落合の歴史（復刻版）』が復刻されている。このように地域学・地元学が注目されるよりもかなり早い段階から地域の中でその記憶を聞き取って保存

し，地域の将来について考え，行動し働きかけていく活動が落合地域では行われていた。

Ⅱ．江戸近郊農村としての落合

１．都市近郊農村としての落合

近世において落合のおかれた位置を示す史料に「江戸朱引図」[18] がある。「江戸朱引図」とは，江戸の範囲を示した地図である。発展・拡大を続けた江戸の境界について，文政元年（1818）８月，目付 牧野助左衛門より「御府内外堺筋之儀」について問い合わせがあり，これについて評定所一座にて評議し，江戸朱引図が作成され確定した。

朱引とは，「札懸場境筋並寺社方勧化場境筋」である「御府内」の境界線であり，江戸の境である。これに対し墨引は，「御仕置筋二可当町奉行支配場境筋」であり，町奉行所支配地を表していた。朱引は空間認識としての江戸の範囲を示すものであって〈江戸の境界〉，墨引は江戸の都市行政が実質的に及ぶ範囲を示した〈都市の境界〉との指摘[19] があるが，「江戸朱引図」中の上落合村・下落合村は，墨引の外側であるので町奉行支配地ではなく，朱引の内側ではあるので御府内であるとされている。江戸の境の内側ではではあるが，町奉行支配地の外側に存在するという，江戸の境界と都市行政の境界とのあいまいな境界に存在する地域であった。江戸ではあるが，町奉行の支配には属さないという特殊な地域的性格がこの図から読み取れる。

また，「上落合村明細帳」には，「仲仙道下板橋宿江御傳馬定助郷相勤申候，其外御鷹野御用人足杉之葉榧之葉此分虫ゑひつる虫，其外諸御鷹野御用向相納メ申候」[20] と助郷や鷹野御用をつとめていたことや，「五穀之外菜大根芋茄子白瓜牛蒡苅豆にん志ん江戸江商ひニ出申候」[21] と江戸に多くの野菜を売りに出ていた記録が残っている。

その他，『落合町誌』には近世の落合の様子について，「地内を神田川及び妙正寺川が貫流して，狭いながらも低平の田野を其沿岸に開いて，割合に古い時代より人家を為して居ると思はれるから，土民は恐らく山中暦日のない平和の中に，部落自治を営なんで来たものであらう。」[22] とあり，江戸近郊ののどかな農村として想像されている。行政的にはあいまいな位置にあった都市近郊農村としてのすがたがこれら史料からうかがい知ることができる。

２．古地図にみる落合

近世の落合の様子がわかる古地図に堀江家文書「落合村絵図」の三図[23] がある。『地図で見る新宿区の移り変わり　戸塚・落合編』に収録されている「葛ヶ谷村絵図」，「上落合村絵図」，「下落合村絵図」である。それぞれの図の概略を以下に述べていく。

まず，「葛ヶ谷村絵図」は図の北西から南東にかけて向けて流れる落込川の周辺に田，図の中央には畑が広がる。中央東よりには，自性院が見える。文化３年（1806）の作図で村高82石７斗とあり，17世紀の『武蔵田園簿』と比較して村高はあまり増えてはいない。

「上落合村絵図」は，江戸時代末期のものとされる。図の北側から東に流れる井草村流とは現在の妙正寺川である。図の北東端で神田上水と合流している。落合の地名の由来の地である。

その合流地点より少し西よりに西ノ橋が架かる。ビクニ橋とも図中にあるが，現在の下落合駅前にかかる橋である。この橋から通りを南下していくと泰雲寺が見える。『江戸名所図会』にも描かれた寺であるが現在は廃寺となっている。落合水再生センターのあたりに存在した寺である。その南には八幡宮とある。もとは区立八幡公園周辺が境内地であった月見岡八幡宮である。区画整理によって昭和37年（1962）に現在地に遷座した。そこからさらに南下すると御滝橋（小滝橋）から東西にのびる御滝橋通り（現・早稲田通り）にぶつかる。この小滝橋通りは，現在の中野区や杉並区方面から農家の人々が荷車で野菜を淀橋の青物市場に運び，また江戸・東京方面から下肥を運んだ道であった。[24] 西ノ橋からの道を右に折れて西に向かうと光徳寺や最勝寺といった現存する寺院や後述の法界寺が道筋に見える。この道をさらに進むと新井薬師に出るので新井薬師道とも呼ばれた通りである。北部から東部の川沿いには田が広がり，川から離れた図中央付近には畑地が広がる。道沿いには農家が数件ずつ集まっているのが見られる。

「下落合村絵図」は，同じく江戸時代末期のものとされる。図の北側を東西にはしる太い通りが雑司ヶ谷通りである。現在の目白通りであるこの通りを西に向かって進むと途中で練馬通りと分岐する。練馬通りは清戸道とも呼ばれる江戸と清瀬方面を結ぶ通りである。この雑司ケ谷通りは，西の方の村々から江戸へ出ていくときに往来する重要な道であった。[25] この雑司ヶ谷通りから南下していく坂道がいくつか見られる。七曲坂や西坂である。七曲坂を下って東の方に折れると神田上水に架かる田島橋に出る。さらに進むと高田馬場方面に向かう道になる。馬場下通りとあるが現在のさかえ通りである。この七曲坂付近には薬王院や藤稲荷，氷川社，諏訪明神などが見える。御立場が七曲坂東側と西坂西側に見える。御立場とは将軍が鷹狩りをした場所であり，七曲坂の東側は現在のおとめ山公園の付近である。図の西端には御霊宮とある。現在の中井御霊神社である。

現在の早稲田通り，目白通りと落合を東西に貫く道路が，近世より発達していたことがこれらの古地図からよくわかる。これらの通りは江戸と西部郊外とを結びつける通りであり，その通りの江戸の際の位置に落合は存在していた。これら古地図を手に現在の道と照らし合わせながら歩く体感的作業によって土地の高低など地理的な内容についても実感できるだろう。その際に地形図も併せ持ち歩くと更に効果的になりうる。

３．『江戸名所図会』にみる落合

『江戸名所図会』は，神田の町名主であった斎藤長秋（幸雄）・莞斎（幸孝）・月岑（幸成）が三代にわたって書き継ぎ，天保年間に月岑が７巻20冊で刊行した江戸の地誌紀行である。江戸の各町について由来や名所案内を記し，近郊の武蔵野，川崎，大宮，船橋などの記述がある江戸の町についての記録資料である。

なお，『江戸名所図会』を史料として使用する上で，①発刊時点で現況が変化している場合もあった。②不自然さを感じさせない程度に演出的な空間変形を行っている場合がある。③遠景の図像では人物スケールが演出的に拡大されている場合がある。④ある場面に登場する人物の

身分・性別・年齢などの属性に，一種の理想化が行われている可能性がある。⑤ある特定の場が描き込まれなかった可能性がある。[26] と五点の注意点が指摘されているが，これらの点に留意しつつ現在との比較のという視点で用いれば非常に有用な教材となりうる。

この『江戸名所図会』に掲載されている落合地区の名所としては，氷川明神社，七曲坂，落合土橋，藤森稲荷社（現・東山稲荷神社），黄竜山泰雲寺，一枚岩，落合蛍がある。「落合土橋」の項では，「この地は蛍に名あり。形大いにして光も他に勝れたり。山城の宇治，近江の瀬田にも越えて，玉の如く又星の如くに乱れ飛んで，光景最も奇とす。夏月夕涼多し。」[27] と蛍の名所である当地の様子が述べられている。

長谷川雪旦画の挿絵「落合蛍」には，「此地の蛍狩ハ芒種の後より夏至の頃迄を盛とす草葉にすがるをハこぼれぬ露かとうたがひ高く飛をハあまつ星かとあやまつ游人暮るを待てここに逍遥し壮観とす夜涼しく人定まり風清く月朗なるにをよひて始て帰路をうなかさん事を思ひ出たるも一興とやいはん」とあり，水田の周囲で蛍狩りをする多くの人々が描かれている。同じく長谷川雪旦画の「一枚岩」には，「落合の近傍神田上水の白堀通にありて一堆の巨巌水面に彰れ藍水巌頭にふれて飛灑すこの水流に鳥居か淵犀か淵等その余小名多し此辺は都て月の名所にて秋夜幽趣あり」[28] と江戸近郊の風光明媚な観光地として落合は描かれているのである。

Ⅲ．周縁としての落合

１．落語「らくだ」に登場する落合

落合が登場する落語に「らくだ」がある。あらすじは以下の通りである。[30]

長屋中から毛虫のように嫌われている，本名が馬であだ名をらくだという乱暴者がいた。ある時そこにらくだの兄弟分がたずねていくと，らくだが死んでいた。前夜，湯の帰りに会うと大きなふぐを提げていたのを見かけており，そのふぐにあたったらしい。そこへ屑屋が通りかかる。兄弟分は弔いの費用に家財を買わせようとするが，満足なものは何もない。屑屋は心もちだけといくらか包んで立ち去ろうとするが，兄弟分は屑屋に，月番のところへ行って香典を集めてこいと命じて，商売物の鉄砲ざると秤を取り上げる。次に，大家のところへ行って酒を三升と煮しめと飯二升を持ってくるように，もしだめだといったららくだの死骸を持ち込んで死人に「かんかんのう」を踊らせると言え，と命令される。大家は，家賃を三年間一文も入れないくせに，酒なんかとんでもない。と断ると，屑屋は背中に死骸を背負わされ，大家の家に乗り込んで「かんかんのう」を歌わされる。驚いた大家は酒と煮しめを届ける。同じように兄弟分は屑屋に八百屋から早桶がわりの四斗樽を借りてこさせる。その後，兄弟分は届いた酒を屑屋に無理に飲ませる。屑屋は酔いが回るにつれ態度が大きくなり，逆に兄弟分を脅して酒をつがせるようになる。そしてらくだの死骸を四斗樽に入れ，二人で落合の焼き場へかついで行く。途中で樽の底が抜けたのに気づかず焼き場まで行き，死骸を拾いに戻るが，間違って道ばたに酔って寝ていた願人坊主を樽に詰めてしまう。焼き場で間違って焼かれかけた坊主が目を覚まし「ここはどこだ」「火屋だ」「ヒヤでもいいからもう一杯。」とさげる。

タイトルにもなっているらくだであるが，ここでいうらくだとはヒトコブラクダで，文政４年（1821）にオランダ人によって長崎に持ち込まれ，文政７年（1824）に両国で興行を行っている記録が残っている。[31] この落語「らくだ」は多くの江戸の人々にらくだが知られるようになった江戸後期を想定した噺と考えてよいだろう。

落合の焼き場まで屑屋と兄弟分の二人で担いでいく場面で，八代目三笑亭可楽の口演では「ここが早稲田だろう。これを真っ直ぐ行きゃ新井の薬師。左へきれりゃ落合だ。どんどん行け，どんどん。どんどん行け。構うこたぁねぇ，どんどん行けよ。田んぼ道だ，気を付けろよ，滑るといけねぇからよ。」[32] とある。ここで想定されている道筋はいわゆる新井薬師道であろう。妙正寺川を西ノ橋で渡って，新井薬師へ至る道であったので新井薬師道と呼ばれていた。現在では山手通りに隔てられてしまっているが，落合水再生センター前の上落仲通りから西に向かって落合斎場に向かう道がある。これがいわゆる新井薬師道の名残である。東京の市街地から落合の火葬場に来るときの道はほぼ決まっていた。その道を人々はカソウバトオリ（火葬場通り）と呼んでいた。高田村の砂利場から下落合の氷川神社の前に出て，そこから西に進んで，妙正寺川を西の橋で渡って，光徳寺，最勝寺の前を通って火葬場に達する道であった。市街地から火葬場へ頻繁に通うようになってからの呼称と考えられ，近世にはむしろ新井薬師道と呼ばれていた。[33] というが，近世に火葬場として存在した法界寺に向かうのどかな農村を通る田んぼの中の道であった。

これに対し，同じ落語「らくだ」でも火葬場まで別の道筋をたどったものある。「屑屋とらくだの兄弟分がらくだの死骸を運ぶところで「ここを姿見橋てんだ。この橋を渡れば高田の馬場。道はわりいが，いわば一本道。……突き当たって左へ行けば新井の薬師，右に行けば焼き場だ」というくだりがある。「姿見橋」は『道濯』で紹介した神田川にかかる面影橋の別名。どうやらいまの早稲田通りあたりを四斗だるをかついで行ったらしい。」[34] と早稲田通りを通っていったという想定もあり，近世，落合のランドマークであった火葬場へ向かう道筋が複数あった。

２．火葬場について

落語「らくだ」に登場する火屋（火葬場）とは現在の落合斎場のことである。この落合斎場について近世の記録としては，『新編武蔵風土記稿』の上落合村の項に法界寺があげられている。「法華宗江戸市ヶ谷南町蓮秀寺末，茶毘所なり，無縁山と号せり本尊釈迦を置」[35] と茶毘所として記載されている。また，『東京博善株式会社五十年史』には「落合火葬場は新宿区市ヶ谷薬王寺町にある日蓮宗蓮秀寺の末寺無縁山法界寺（現在廃寺）の茶毘所として上落合に将軍家綱（1651～1679）の時代に発足し，その経路は明らかではないが，明治維新を経て，明治26年（1893）に旧東京博善抹式会社の傘下に入った。」[36] とあり，その存在は江戸初期までさかのぼることが出来るようである。

また，周防岩国出身の武士で御三卿の清水家に仕えた村尾正靖が，江戸時代後期に江戸近郊をめぐった際の紀行文である『嘉陵紀行』にも落合の火葬場についての記述がある。その中には，

「高田の馬場の北側の道を西に向て行，高田は本名戸塚村と云此辺なへて高田と唱へ来る門前に石碑有，戸塚村と彫付たり，少し行ば，右の方林樹の間人家有，猶行て橋あり，戸塚村の橋といふ井の頭の流れにわたす，長さ三丈計の石橋の手前に，薬師堂林の中小高き処にあり，橋より南に行道あり，一里計にて，大久保百人町に出ると云，橋の東を望めば，下落台村薬王院の森みゆ，さしわたし廿五丁も有ぬべし，橋を渡りて行は，左右田也，三丁計行て山口に人家四五戸酒肴うる家抔あり，人つとひて休らふ体也こゝの体，馬次の場ともいひつへく思はる，山の下人家の手前より東にゆけば，七曲りに出ると云，山を登りに人家の前を過て，少し右の方にまがりて廿歩計行は，岐あり，一は東に行一は西に行爰より北に転じて山徑を行ことしばしにて，又人家あり，そこの前より西南に向て行ば，上落合村，道の北に寺あり，最勝寺と云，猶少し行ば，火葬場有，路傍に垣ゆひまはして，うちは見えず，入口二ッあり，榜を建て，焼場法界寺と書付，爰を霧ケ谷といふ，こゝの道の南に行道あり新井村へ行と云，法界寺の出はづれを狼谷といふ，乗馬の死たるを捨る処也と云，猶少し行ば，左右畑路を横ぎりて溝あり，板橋をわたす，橋の向は上高田村，手前は上落合村也，」[37] と新井薬師道と思われる道筋を法界寺に向けて歩む様子が述べられている。法界寺のあたりは霧ヶ谷と呼ばれていたことがわかる。この地名については，高田落合附近の図で「東に落合薬王院あり，西に高田村八幡社あり，中央に霧谷狼谷の焼場あり。霧ヶ谷又狼谷と唱ふる焼場，四谷新町の西にもあり，三ヶ所同名，何の故ありや不知」[38] と筆者は江戸の火葬場の所在地の地名の共通性に気づいている。

近世後期において江戸の御府内をその外側と画した黒引と朱引の線の間に挟まれた，江戸そのものでもなければ，周辺農村でもないという両義的な位置に，大部分の火葬場は立地している。江戸の町の住民たちが他界への空間として認識する周縁的，両義的空間に火葬場は立地し，しかもそれを象徴するかのように川を渡って火葬場に行くという立地になっていた。上落合の火葬場も神田上水を渡って，あるいは妙正寺川を渡って外に出たところにあるのである。上落合の火葬場は上落合村のものではなく，あくまでも江戸の町にとって必要な施設であり，意味をもった配置だった[39] と福田アジオが指摘するように，落合の火葬場は，江戸の周縁を強く意識させるランドマークであった。江戸の五三昧の中で落語の題材に取り上げられるように火葬場といえば落合という意識が江戸庶民には強くあったのだろう。台地の辺縁，落合の地名の由来となる妙正寺川・神田上水に隔てられた境界地域という立地がさらにこの意識を強めたのだろう。

３．荷田在満『落合物語』に登場する落合

『落合物語』は荷田春満の弟，高惟の子で後に春満の養子となった荷田在満の寛保２年（1742）の著作である。物語のあらすじは，武蔵国上落合村の百姓・伝右衛門が一人娘の病気平癒を祈願して雑司が谷の鬼子母神に日参する。満期の日に若い女が現れ，自分の母親が下落合村の源右衛門に殺されかかっていることを語り，その救助を条件に娘の回復を約束する。伝右衛門は狐の仕業を信じ込むが，源右衛門宅に捕らえられていた狐を見つけ，源右衛門と談判

して十五両と交換して身柄を解放するが，娘はその甲斐もなく死んでしまう。実は狐ではなく源右衛門父娘が伝右衛門をだまし大金をせしめたというものである。[40] この物語の末尾には，「ことし寛保ふたつの年，卯月の末，さつきのはじめの頃にありける事にて，まさしき事になんあると，ある人のかたりしまゝに記しぬ。」[41] とあるように実際にあった狐の霊力を利用した詐欺事件を物語風に記したものであるが，宮田登が指摘するように，「稲荷の古社はいずれも高台の端の方に分布しており，台地の縁部がいわば上の世界と下の世界との境にあたり，そこが聖地視されていた結果である。また，狐は土地の守護霊の性格を持つもであり，稲荷の祠が数多いのは江戸の特色の一つであるが，都市化のプロセスで人間側が自然の領域を侵食しているという一種の負い目を自覚していたことを物語っている。」[42] と自然を侵食し，拡大している江戸のあいまいな周縁部にあり，かつ上の世界と下の世界の境にある落合には，このような話ができる下地があったのであろう。そのようなイメージを元にこの落合物語が書かれたのだろう。

また，宮田は，「洪積台地の端が明らかに江戸という大都市が開発されていく段階での要衝になっており，都市住民にとってみると，川や橋あるいは坂によって，周縁とか境を認識する地点であり，そこを越えると，もう一つ別の世界になる。その時，不思議な音や光や形を共同幻想としてとらえたのだろう。江戸という大都市が，その縁の部分に，かつての聖地を不思議な装置として温存させていたことは，依然都市の活力をよみがえらせ，自らを維持できる可能性を秘めていたことになる。」[43] とも指摘しているが，台地の縁部にあたる落合は，朱引内・墨引外という立地や火葬場の存在，そして落合の地名の由来となった二つの川の存在などから江戸の周縁を強く認識させる特殊な地点であった。

おわりに

落合は地域素材の掘り起こしが進んでいる地域である。その際の作業として地域の住民のコミュニケーションが重視されていた。地域住民のコミュニケーションに基づいた地域素材の掘り起こしによって記録されたその歴史は，多くの書籍などでその成果が発表されている。本稿では，古地図・紀行文・落語・擬古文と異なるジャンルの，かつ学校における学習の中ではあまり取り扱わないようなものまで取り上げてきたが，これら史料は，新宿区内の図書館を利用することで手に入るものばかりである。地域に関する史料を用いて地域の中に蓄積された教材開発が十分に可能な地域なのである。特に江戸という都市の拡大・発展とその周縁部の村のありようというものをとらえさせようということが可能であろう。現在，住宅街である落合のまちと近世の落合の村との対比という視点から捉えることができよう。また，落合は，近代，特に関東大震災以降に開発が進んだ地域であるが，江戸時代から残る道路や台地と低地を結ぶ坂の利用などで地理的な内容をも含めた，より体感的な身近な地域を調べる活動も可能である。身近な地域を調べる活動を通して郷土に対する愛情を育成することも，近世についての学習では，非常に重要な要素であり，意義のあることである。地域素材の掘り起こしを進めてきた地

域との対話も取り入れていくことで地域に生きる一員としての帰属感も高めていきたい。なお，今回史料を提示するにとどまった部分も多く，また『遊歴雑記』のように収録しきれなかった史料もあり今後更に指導方法・内容の改善を図っていきたい。

【注】

1）文部省『中学校指導書社会編』 1970年　p247
2）西川幸治「地域文化財の保存修景計画」『21世紀の思索　地域の文化財』 1986年　p11
3）岩田一彦『社会科授業研究の理論』 明治図書　1994年　p62
4）『中学校学習指導要領解説 社会編』p82
5）『同上』 p84～5
6）『同上』 p85
7）『同上』 p79～80
8）『小田原衆所領役帳』近藤出版社　1969年　p71
9）『同上』 p92
10）蘆田伊人編集校訂『新編武蔵風土記稿』第一巻　雄山閣　1996年　p257
11）『同上』 p257・258
12）『同上』 p267
13）北島正元校訂『武蔵田園簿』近藤出版社　1977年　p7
14）『同上』 p60・62
15）『小田原衆所領役帳』 p93
16）新宿区生涯学習財団 新宿歴史博物館『新修 新宿区町名誌』 2010年　p155～163
17）コミュニティおちあいあれこれ『明治の思い出』（復刻版）1998年　発行にあたって
18）『東京百年史』第一巻附図
19）千葉正樹『江戸名所図会の世界』吉川弘文館　2001年　p176
20）新宿区教育委員会編『新宿区文化財総合調査報告書』四　1978年　p92
21）『同上』 p93
22）落合町誌刊行会『落合町誌』昭和７年　p15
23）新宿区教育委員会『地図で見る新宿区の移り変わり　戸塚・落合編』 1985年　p68～73
24）新宿区立新宿歴史博物館『新宿区の民俗（4）落合地区編』 p4
25）『同上』 p3
26）『江戸名所図会の世界』 p85
27）鈴木棠三・朝倉治彦校註『江戸名所図会（四)』角川文庫　1967年　p193
28）『同上』 p148
29）『同上』 p144
30）CD 『NHK落語名人選16　八代目三笑亭可楽』 1990年
31）川添裕『江戸の見世物』岩波新書　2000年　p103
32）CD 『NHK落語名人選16　八代目三笑亭可楽』1990年
33）『新宿区の民俗（4）落合地区編』 p110
34）佐藤光房『東京落語地図』 朝日新聞社　1988年　p96
35）『新編武蔵風土記稿』第一巻　p257～8
36）東京博善株式会社『東京博善株式会社五十年史』 1971年　p5
37）『嘉陵紀行』第三篇『江戸叢書』第一巻　p179
38）『同上』 p178

39)『新宿区の民俗(4)落合地区編』 p103
40) 官幣大社稲荷神社編纂 『荷田全集』第七巻 1990年 p619～623
41)『同上』 p622
42) 宮田登『都市民俗論の課題』 未来社 1982年 p168
43)『同上』 p171～2